|  |  |
| --- | --- |
| |  | | --- | |  | |
|  |
| |  | | --- | | 部分準備銀行制度  [**マレー・N・ロスバード**](http://www.lewrockwell.com/rothbard/rothbard-lib.html)  これまでに私は、現代で起こっている健全で自由な市場のマネーから国に制度化されて膨張したマネーへの移行の一面について解説してきた。フランクリン・ルーズベルトが1933年に金本位制を廃止し、連邦準備制度によって認可された紙幣が私たちの「お金の基準」になったことだ。この移行の流れのもう一つの肝心な側面は、政府が1913年に連邦準備制度を創設して銀行をカルテル化したことだ。  銀行業務は、経済システムの中でも特に不可解な部分だ。問題の一つは、「銀行」という言葉がいろいろな活動を指し、しかも異なる意味にとれる点だ。ルネッサンス時代、イタリアのメディチ家とドイツのフッガー家は「銀行家」だった。ただし、彼らの金融活動は民営であるだけでなく、少なくとも合法で、インフレを引き起こすこともなく、しかもかなり生産的な活動だった。本質的には、彼らは一流の商人から転向した「引受銀行」だった。商取引を行うにつれ、商人たちは顧客への貸し付けを広げ始め、それは上記の偉大な銀行一家たちの場合、「貸し付け」の活動が本業を大きく上回るまでに至った。これらの商人は自身が得た利益や貯蓄から貸し付けを行い、融資の利息で利益を得ていた。故に、彼らの活動は自らの貯蓄を生産的に活用する手段だったわけだ。  銀行が自らの貯蓄を貸し付けたり、他者の貯蓄を活用している間は、銀行の活動は生産的で、申し分無い。現代の商業銀行システムにおいても、もし私が6ヶ月以内に換金できるCD（預金証書）を1万ドル購入して固定利息を得るとすれば、私は自分の貯蓄を銀行に貸し付けていることになる。銀行はそのお金をより高い金利で他に貸し付け、利息の差額が銀行の利益になる。 信用でき、生産的な借り手に貯蓄を活用してもらうという機能を銀行が果たした結果の報酬だ。ここまでの流れには何の問題もない。  かの偉大な「投資銀行」の数々についても、実は同じことが言える。投資銀行は19世紀に資本主義が開花するのに合わせて発展してきた。投資銀行は自らの資本や、他から投資されたり貸し出された資本を利用して証券を株主や債権者に売り、企業が資本を得る手助けをしてきた。投資銀行の問題は、 国債を引き受けることが彼らの主な投資業務の一つだったことだ。それにより投資現行は政治に腰まで浸かるようになり、政府に圧力をかけ政策を左右する強烈な誘惑にかられることになった。政府が税金を徴収することで、投資銀行たちとその顧客が購入した国債を払い戻せるからだ。故に、19世紀から20世紀にかけて政治に強大な悪影響を及ぼす投資銀行が生まれた。特に、西ヨーロッパのロスチャイルド家とアメリカのジェイ・クック及びモーガン家だ。  19世紀が終わりを迎える頃には、モーガン家は率先して自分たちの利益が関わる産業をカルテル化するよう、アメリカ政府に働きかけていた：最初は鉄道業で、やがては製造業にて。産業を自由な競争から遮断し、政府の権力を利用して生産を抑制し、価格をつり上げるためだ。  特に、投資銀行は商業銀行のカルテル化を進める急進派だった。商業銀行は、ある程度までは、自らの資本や、自ら預金証書と引換えに得たお金を貸し出している。しかしたいていの場合、商業銀行は巨大な詐欺を基盤とする「預金銀行」なのだ。ほとんどの預金者は、自分のお金が銀行に保管され、いつでも引き出せるようになっていると信じている。もしジムが近所の銀行の当座預金口座に1,000ドル持っているとしたら、ジムはそれが「払い戻し可能な預金」だと知っている。つまり、彼が自分のお金を引き出そうと思えば、銀行はその場で彼に1,000ドル、現金で渡すと約束されている。自然と、ジムのような人々は、自分たちのお金が銀行に安全に保管されており、いつでも引き出せると確信することになる。それゆえ、彼らは当座預金口座を倉庫の受領書のようなものだと考える。旅行に出かける前に椅子を倉庫に預け、受領書を見せれば椅子がすぐに手元に戻る、と信じているわけだ。 銀行側は倉庫のたとえを歓迎するだろうが、残念ながら預金者は組織ぐるみでだまされている。彼らのお金は、もはや存在していないのだ。  誠実な倉庫は、預けられた品物が保管室や金庫に存在することを保証している。しかし、銀行の運営のされかたは、17世紀にアムステルダム銀行やハンブルグ銀行のような預金銀行が栄えた頃とはかなり異なる。その時代には、銀行は倉庫と同じように運営され、領収書は全て預けられた資産、つまり金や銀によって裏付けられていた。この誠実な預金制度、あるいは「振替」銀行は、「100%準備」銀行と呼ばれた。しかしそれ以来、銀行は習慣的に倉庫の領収書を、裏付け無しで発行し続けることになる。最初は紙幣で、今や預金として。実のところ、それら銀行は現金や正式な貨幣の代わりに偽の倉庫受領書を発行し、それがあたかもきちんと裏付けされた紙幣や当座預金であるかのようなふりをする詐欺師だ。銀行は文字通り無からお金を作り出すことで利益を得る。今は、紙幣ではなく全て預金という形でそれを行っているだけだ。この手の詐欺、あるいは貨幣偽造は「部分準備銀行制度」という名の元に正当化されている。銀行の預金のうち、手元に準備されてすぐに換金できるものは約束された額のほんの一部だけだ、ということだ。（現在、アメリカでは 連邦準備制度の規定により最低準備率は10%に固定されている。）  **部分準備銀行制度**  中央銀行が存在しない世界で、部分準備制度がどう機能するのか、見てみよう。私はロスバード銀行を創立し、現金で1,000ドルを投資する（投資する物が金貨であるか、紙幣であるかはこの際関係ない）。次に私は、お金を消費したいか投資したいと考えている誰かに10,000ドルを「貸し付ける」。手元にある以上の額をどうやって「貸し付け」られるのだろう？そう、それこそが連邦準備制度の「準備」の成せる業なのだ。私は10,000ドルの当座預金口座を開設して、ジョーンズ氏（仮称）に貸し出すだけでよい。ジョーンズ氏はどうして私から借りる必要があるのだろう？まず、私からならば貯蓄を目的にする者たちよりも低い利子で借りられる。私はお金をいくらでも無から作り出せるので、自分で確保する必要がないからだ。（19世紀であれば、私は自分で紙幣を発行できただろうが、今や連邦準備制度が紙幣を一括管理している。）ロスバード銀行では当座預金は現金と同等に機能するので、国に流通する貨幣は、魔法のごとく、10,000ドル分増加する。膨張を孕んだ偽札作りのプロセスが始まったのだ。  19世紀のイギリスの経済学者、トーマス・クックは「銀行が自由に取り引きを行うということは、詐欺の横行を許すことと同じだ」と正しく看破した。しかし、政府の支援なしに、自由に偽札作り（「自由な銀行活動」とも呼ばれる）を行えば、重大な落とし穴がいくつも出現する。まず、私はどうやって信用を得るのだ？ロスバード銀行の当座預金を受け入れる理由はどこにあるのだ？次に、わたしが信用され、間抜けな人間からの信頼をだまし取ったとしても、別の問題がある。銀行同士の競争が激しく、誰もが競争に参加できることから起こる問題だ。ロスバード銀行は全員を顧客にしているわけではないのだ。ジョーンズ氏が当座預金を手にした後、彼はそれをどこかで使うことになる（それ以外、お金を借りる理由などあるだろうか？）。遅かれ早かれ、彼が休暇や事業の拡大に使うお金は、他の銀行、例えばロックウェル銀行の顧客が提供するモノやサービスに支払われる。ロックウェル銀行は私の銀行内の当座預金口座を押さえておくことに興味は無い。ロックウェル銀行は準備金を手に入れ、現金を元に自ら詐欺を積み上げていくことに興味があるのだ。単純に言うと、ロックウェル銀行はロスバード銀行の１万ドル分の小切手を手に入れると、膨張を孕んだ偽札作りの詐欺を自分で行うために、現金との引換えを要求するはずだ。しかし私はもちろん、1万ドルを払えないので、おしまいだ。破産し、摘発されることになる。当然、私は横領の罪で牢屋に入れられる。私と私の詐欺的な当座預金口座は業界から消え去り、通貨供給量からも除外される。  このように、政府による支援と規制が無く自由に競争が行われる場合、部分準備による貨幣偽造には限りがある。銀行はカルテルを形成して互いを支え合うことができるが、通常、市場においては政府の規制無くしてカルテルは機能しない。カルテルを壊そうとする業者を政府が摘発してくれる必要がある。この場合、競合する銀行に払い戻しを命じることを意味する。  **中央銀行制度**  こうして、銀行自身が政府の力を借りて自らをカルテル化したのが中央銀行だ。中央銀行は1690年代のイングランド銀行に端を発し、18世紀と19世紀にかけて西洋社会に広まり、最終的にはカルテル化を推進する銀行家たちの手により、1913年に連邦準備制度の元、アメリカで強制化された。中央銀行の創設を特に喜んだのは、カルテルを考えついたモーガン家のような投資銀行たちだ。モーガン家はその時点で、商業銀行にまで活動の手を広げていた。  現代の中央銀行制度においては、中央銀行は一括して銀行券を発行する権力を握っている。（元々は、実体のない銀行預金の証書ではなく、手書きや印刷の倉庫証券だった。）今や、銀行券は政府の紙幣と同一となり、それゆえに国の金融「基準」と見なされている。人々は、実体のある貨幣と銀行預金を同じように欲しがるのだ。そういうわけで、もし私が当座預金を持つ銀行から1,000ドルを引き出そうとすると、銀行は連邦準備理事会に連絡し、連邦政府から1,000ドル分の連邦準備券（今日のアメリカにおける通貨だ）を「購入」することで、銀行自らの当座預金を引き出すことになる。言い換えると、連邦政府は銀行にとっての銀行の役割を果たすのだ。銀行は連邦政府に当座預金を預け続け、これらの預金が準備金となり、小切手に記載された金額の10倍もの額に生まれ変わるねずみ講が行われる。  今日の世界では、貨幣偽造は次のように行われる。連邦準備理事会が、いつものように通貨の供給量を拡大（インフレを起こすという意味だ）を決断したとしよう。連邦準備理事会は（開かれた市場、と呼ばれている）市場にて資産を購入する。何を購入するかは重要ではない。重要なのは小切手で支払うという点だ。連邦政府はもちろん、企業の株だろうが建物だろうが外貨だろうが、どんな資産でも購入したければできる。しかし実際には、連邦政府はほとんど常に、アメリカの国債を購入する。  連邦政府が「公認された」国債取扱い業者（ごく一部の業者だけだ）、例えばウォール街のシアーソンやリーマンから1,000万ドルの短期アメリカ国債を購入するとしよう。連邦政府は1,000万ドルの小切手を切り、1,000万ドル分のアメリカ債券と引換えにシアーソンやリーマンに渡す。連邦政府はどこからシアーソンやリーマンへ払う1,000万ドルを手に入れるのだろう？無から作りだすのだ。シアーソン、リーマンにとって小切手の使い道は一つしかない。チェース・マンハッタンのような商業銀行の当座預金口座に預けるのだ。これで国の「通貨供給量」が1,000万ドル分増えたことになる。誰の当座預金口座も目減りしていない。1,000万ドルが純増したのだ。  これは、膨張を孕んだ偽札作りのほんの始まりにすぎない。チェース・マンハッタンは連邦政府の小切手を喜んで受け取り、連邦政府にある自らの 当座預金口座にそれを預け、預金額を1,000万ドル増やす。しかしこの当座預金口座は銀行の「準備金」を成しているので、国全体で準備金が1,000万ドル増えたことを意味する。それはつまり、チェース・マンハッタンがその準備金を元に預金を作り出せることも意味してしまう。小切手や準備金が（ロスバード銀行の預金で起こったことと同様に）他の銀行へ流出するに従って 、それぞれがダニのように膨張し、銀行システム全体として当座預金額が1億ドル、つまり連邦政府による資産購入時の10倍に膨れ上がるまで続く。銀行システムの下では、準備金は預金額の10％に押さえることが可能であり、つまり「お金の乗算器」（銀行が準備金を元手に預金を行える金額）は10倍に設定されていることになる。連邦政府が1,000万ドルの資産購入を行えば、それはすぐに10倍に膨れ上がり、銀行システム全体として1億ドル分、通貨の供給量が増えることになる。  奇妙なことに、経済学者は全員、このプロセスにおける道徳上の、あるいは経済的な効果についてははっきりと否定するくせに、手続き自体には賛成するのだ。不幸なことに、銀行の謎の解明に招待されていない一般大衆は、彼らのお金が「銀行にある」と未だに信じている。  結果的に、連邦準備理事会や他の商業銀行は、銀行カルテルを生み出して規制する巨大な政府組織として動いている。連邦政府は財務危機に陥った銀行を支援し、銀行制度を中央で一本化して調整する。そのおかげで、チェース・マンハッタンだろうがロスバードだろうがロックウェルだろうが、どの銀行も一斉に膨張できるのだ。自由な金融制度の元では、ある銀行が他より突出して膨張すると速やかに倒産する危険性がある。しかし今や、連邦政府の元で、全ての銀行は同時に、歩調を合わせて拡大できるのだ。  **「預金保護」**  しかし、たとえ連邦の保護を受けていても、部分準備銀行制度は危ういままだった。そこで1933年に、ニューディール政策は「銀行預金保険」という嘘を付け足した。「保険」という気高い言葉を用いて、全くのでっち上げを覆い隠したのだ。貯蓄貸付のシステムが1980年代終わりに瓦解した時、FSLIC（連邦貯蓄貸付保険公社）の「預金保険」が単なる詐欺であることが明らかになった。「保険」は連邦政府が裏付けを持っていないことの隠れ蓑にすぎなかったのだ。最終的には哀れな納税者が貯蓄貸付組合たちを救済した。しかし、以前は崇められていた商業銀行向けのFDIC（連邦預金保険公社）がいまだに残っている。FDIC自身が「保険」をかけている巨額の預金のうち、1%未満しか実際に所有していないため、年を経る毎に危うさを露呈している。  「預金保険」という考えそのものが詐欺なのだ。元々破産している上に、大衆が詐欺をようやく見抜いた瞬間に崩壊するような組織（部分準備銀行制度）をどうやって保証できるというのだ？例えば、明日にでもアメリカの大衆が突然銀行の詐欺に気づき、朝一番に銀行に押し掛け、異口同音に現金の引き出しを要求したとしよう。何が起こるだろう？銀行は困惑した顧客に対して、貸し出している金額の10%しか拠出できないため、瞬時に破産する。しかしその代わりに、全ての銀行を救済する目的で巨額の増税を行ったとしても、全く良い効果は得られない。どちらも間違っている：連邦政府ができる唯一のことは、与えられた権限を利用して、銀行の預金者全員に払い戻しを行えるだけの紙幣を刷ることだ。しかしながら、現在の銀行制度の下では、これを行うとただちに恐怖のハイパーインフレが待ち受けているだろう。  銀行の保証された預金額が合計で16兆ドルだとしよう。理論的には、銀行の取り付け騒ぎが起こった際、連邦政府は緊急手段を駆使して16兆ドル分の紙幣を刷り、連邦預金保険公社に供給して預金者に払い戻しを行うことができる。問題は、この巨額の救済に勇気づけられ、預金者が直ちに余分の16兆ドルを銀行に再度預金してしまうことだ。銀行の預金高は合計で16兆ドル増加し、それは銀行から供給される通貨の量を10倍に増やし、結果として銀行の所有高の合計を160兆ドル増やすことにつながる。ハイパーインフレと、通貨の完全な崩壊が直ちに起こるだろう。  *この記事は最初、*[The Freeman](http://www.fee.org/vnews.php?sec=iolmisc)*の1995年10月号に掲載され、許可を得た後にここに採録されています。*  *マレー・N・ロスバード (1926-1995) はモダン・リバタリアニズムの創始者であり、オーストリア学派の学長を務めました。著作には*[The Ethics of Liberty](http://www.amazon.com/exec/obidos/ASIN/0814775063/lewrockwell/)（自由の倫理学）*、*[For a New Liberty](http://www.laissezfairebooks.com/product.cfm?op=view&pid=MR0141&aid=10108)*、[その他多数](http://www.mises.org/mnrbib.asp)があります。彼はルートヴィヒ・フォン・ミーゼス 大学とリバタリアン研究センターの副学長も努め、ルー・ロックウェルと共にThe Rothbard-Rockwell Reportの編集も行いました。*  [**マレー・ロスバードの記事一覧**](http://www.lewrockwell.com/rothbard/rothbard-arch.html)  [**LRCは皆様の寄付により運営されています。**](https://www.libertarianstudies.org/lrdonate.asp) | |
|  |
|  |